

Jネットの会員の皆様 はじめまして

上福岡市 市村喜幸（板倉区出身）

新年の祝賀に囲まれて十四市町村が合併、新上越市が誕生した。私の生まれは板倉町大字久々野である。「くぐの」とも「くぐの」ともよばれ、ここは時の流れに合わせるように変わってきている。

久々野は関川支流大熊川最上流域。往古は仏野といひ、山寺の参詣人が休んだ所であった。地名はこの仏野が転訛したとするのが有力の説である（寺野郷十誌稿）。

久々野村は始め高田藩領、天和元（一六八一）年幕府領、寛保元年（一七四一）からは再び高田藩領である。

久々野村は江戸期から明治二十二年（一八三九）年、猿供養寺村との合併までの村名である。合併前戸数一七五、人口九六〇、猿供養寺村は戸数八二、人口四七七であった。寺野村となり、それぞれ

寺野村の大字となる。

猿供養寺地区は関川支流大熊川最上流域。山寺薬師を中心とする山岳仏教の山寺三千坊の寺を中心として出来た集落、「今昔物語集卷十四」の「越後の国国寺僧為猿写法花語第六」によれば越後の国三島郡国寺の僧のもとに二匹の猿が山芋や木の実などを持参して法華経の書写を依頼したと伝える。

類似の話は「法華経験記」「古今著聞集」「元亨釈書」にも見え、いずれも三島郡の寺での出来事とするが、当地での事件を誤り伝えたものと言われている。

山寺薬師は約一三〇〇年の昔白雉（はくち）年間（六五〇～六五四・孝徳天皇の御世）に僧阿果が修験道的な山岳仏教の先達として丈六山（たけのやま）を開

創したと言われ、以来行基、禊形、紀躬高等の名僧知識にまつわる古典伝承で山寺三千坊の名蹟としてうたわれてきた。その後加賀の国蜀世の争乱、鎌倉に敵した為などによる兵せんにかかり仏蹟ごとごとく灰燼に帰したとされる（山寺薬師奉讃会由来より）。



山寺薬師さま



山寺薬師参道の杉と石段



五月八日はお薬師さまの縁日だ。学校も休みとなるが多かった。中央に薬師如来、右に阿弥陀如来、左に釈迦如来の三尊仏のお寺にお参りし、水を飲んできたものである。土産物店、屋台も出店し賑わい、綿飴、笛等買ってもらい楽しい一日だ。

曾祖母ヨシが猿供養寺の生まれのためか、祖母手セは肩、腰が痛むときには薬師さまへお参りに行くと言う。子供ながらに付いていくとお賽銭を投げ入れて何やら暫し手を合わせる。寺の一角には黒光りする綺麗な石が沢山あった。それを手に、体によく効く水「延命水」を飲んで帰るのである。手足、腰肩と叩いていた。

ひと月もして良くなると、それに加えて新しく手ごろな石を持って又お参りに行く。頭を叩いて良く効くならば子供もそうしたのであるが、それはなかった。先頃、帰郷の際山寺薬師をお参りする。石はあったが、風化したのか、人様の手となる。

風習として、六月になると親戚、家中揃って行く『おおだうえ』よく行った山が『ふくろ』だった。今「やすらぎ荘」が建ち宿泊と温泉が楽しめる。ここは門名(かどな)「大上(おおうえ)の家(うち)の田圃であった。

その日男衆と子供は苗撒きと種植えをする。女衆は『はか植』をしてゆく。蛭は溜池や沼地などどこにもいたが、大上(おおうえ)の『ふくろ』は特に多かった。股引き(ももひき)の藁の結び目あたりをくくって脈脛(ふくらはぎ)から脛(すね)、子供では太腿(ふともも)まで入り込んでいた。血を十分吸った奴は大きい蛭(なめくじ)か、大人の親指ほどの薄黒い大きさになって出てきた。

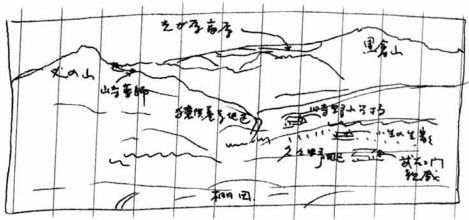
小丘(こびり)は大変な馳走で大喜びである。
 Jネットの皆様、一度泊まって熱燗と刺身、翌朝お薬師さま、どつしりと座る黒倉山とそのふもと『光が原高原』をお勧めする。紅葉は見事なものがあつて忘れられないものである。
 (東京新潟板倉会事務局長)



薬師如来、弥陀釈迦様



延命清水



山全景